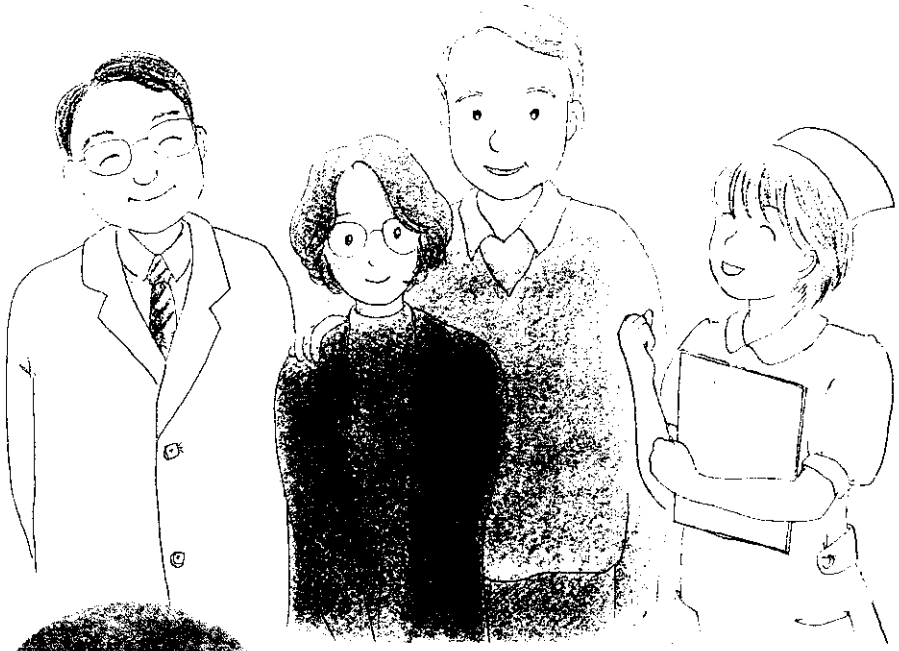
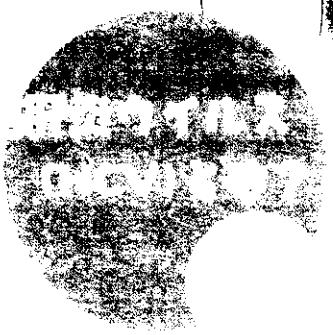
C型肝炎ウイルス検査を受けられる方に





肝炎を起こす原因にはいろいろありますが、わが国ではそのほとんどが肝炎ウイルスの感染によるものとされています。ウイルス肝炎のうち、C型肝炎ウイルス(HCV)の感染によるものをC型肝炎と呼びます。

C型肝炎は、かつて非A非B型肝炎と呼ばれていたものの1つですが、1988年に原因となるウイルスが発見されてC型肝炎ウイルス(HCV)と名づけられ、翌1989年から検査ができるようになり、1990年代半ばから今日使われている検査法が確立しました。

今日では、かつて非A非B型肝炎と呼ばれていたもののほとんどがC型肝炎ウイルス(HCV)の感染によるものであることが明らかにされています。

C型肝炎ウイルスの
持続感染者(HCVキャリア)

C型肝炎ウイルス(HCV)が体内に入り、肝臓で増殖する(感染する)と、一定期間(潜伏期)を経てから「身体がだるい」「食欲がない」「吐き気がする」などの症状が見られ(発症)、それに引き続いて皮膚が黄色くなること(黄疸)があります。これが急性肝炎と呼ばれる状態です。

C型肝炎ウイルス(HCV)に感染した場合、成人では急性肝炎になっても症状が軽かったり、まったく症状が出ない場合(不顕性感染)が多いため、本人が気づかないことが多く、肝炎ウイルスが身体の中から排除されずに住みついてしまう(キャリア化する)ことが多いことがわかっています。このような状態にある人をC型肝炎ウイルスの持続感染者(HCVキャリア)と呼びます。

C型肝炎では、症状が軽かったり出ない場合が多いため、本人が気づかないうちにキャリア化する場合が多いことがわかっています。

●急性肝炎の一般的症状

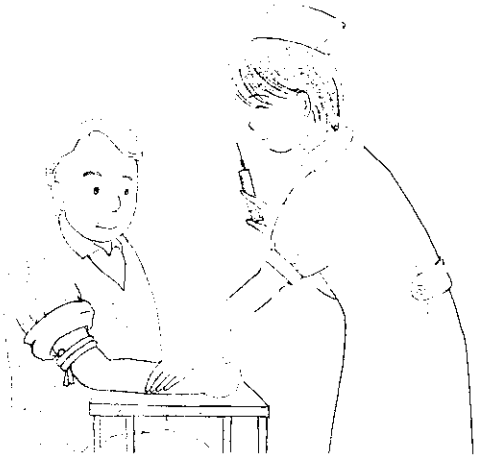
身体がだるい
食欲がない
吐き気がする
白眼や皮膚が黄色くなる

C型肝炎ウイルス(HCV)の検査

C型肝炎ウイルス(HCV)に感染しているかどうかは、採血して検査します。(検査は、HCV抗体半定量検査と、HCV-RNA検査との組み合わせにより行います。)

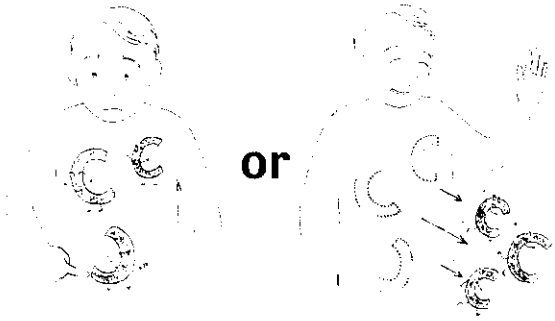
HCV抗体検査が陽性の人は、ウイルスが「身体の中にいる状態(感染している場合)」と、「身体から排除された後の状態(感染既往を示す場合)」とに分けられます。

今回受けられる検査は、ウイルスが現在、身体の中に「いる可能性が極めて高い」か「いない可能性が極めて高い」かを判定するためのものです。



肝炎ウイルスに感染しているかどうかは、採血して検査します。

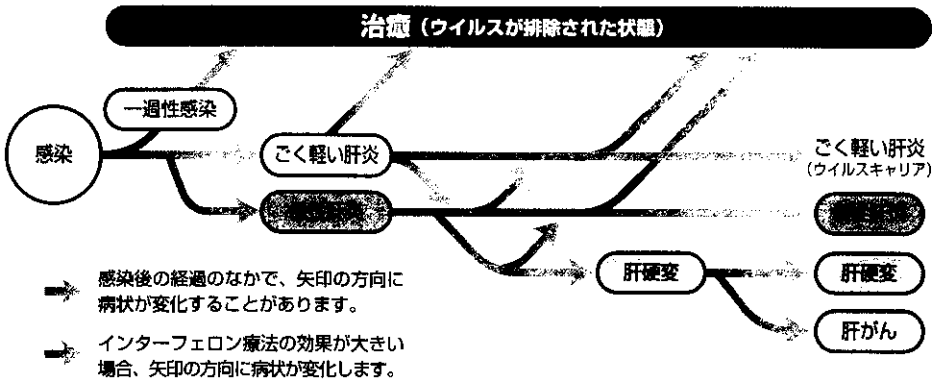
●HCV抗体陽性とは



ウイルスが体の中にいる　ウイルスがいたが治癒した

C型肝炎ウイルス(HCV)に
感染した場合の経過

C型肝炎ウイルス(HCV)に感染すると、多くの人が持続感染の状態(キャリア)となりますが、その後、慢性肝炎となる人も多く、さらに一部の人では肝硬変や肝がんへと進行する場合があることから注意が必要です。



- 感染者は40代以上の年齢層に多く見られます
- 多くの人は感染の時期がはっきりしません
- ウイルスが発見される以前に輸血を受け、感染した人もいます

C型肝炎ウイルスの持続感染者(HCVキャリア)
であることがわかったら

C型肝炎ウイルスの持続感染者(HCVキャリア)の場合、まったく自覚症状がなくても肝機能検査が異常値を示すことがあります。また、ある時は正常値であっても、別のある時は異常値を示すこともあり、気づかないうちに病気が進行することがあります。

そのため、C型肝炎ウイルスの持続感染者(HCVキャリア)であることがわかったら、医療機関を受診して、「肝臓の状態」をチェックするための検査や指導等を定期的に受け、自己の健康管理に役立てるとともに、必要に応じて適切な治療を受けることをお勧めします。

他人への感染を防ぐために

1)C型肝炎ウイルス(HCV)は、主に感染している人の血液が身体の中に入ることによって感染しますが、ごく常識的な注意事項を守っていれば周囲の人への感染はほとんどありませんので、あまり神経質になることはありません。

2)例えば、次のような事項を守るように心がけてください。

①血液が付着する可能性のある、カミソリや歯ブラシなどの日用品の共用は避けましょう。

②血液や分泌物がついたものは、しっかりくるんで捨てるか、流水でよく洗い流しましょう。

③外傷、皮膚炎、あるいは鼻血などはできるだけ自分で手当てし、また、手当を受ける場合は、手当をする人が、血液や分泌物をつけないように注意を促しましょう。

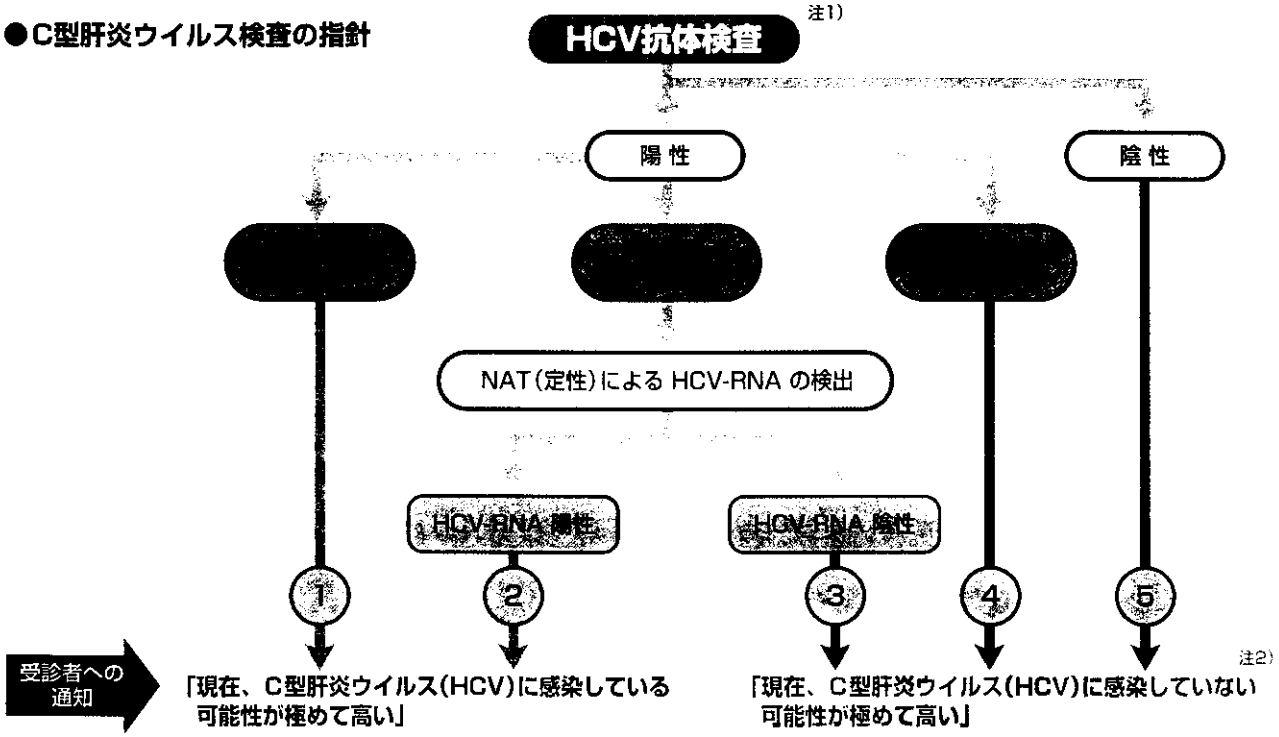
④口の中に傷がある場合は、乳幼児に口移しで食物を与えないようにしましょう。

⑤献血はしないようにしましょう。

おわりに

C型肝炎ウイルスの持続感染者（HCVキャリア）でも、定期的に「肝臓の状態」をチェックし、その状態に見合った健康管理に努めていれば、日常生活の制限などは必要ありません。
また、周囲の人も、C型肝炎についての理解を深めていただくことが大切です。

●C型肝炎ウイルス検査の指針



注1)
HCV抗体の測定は、（1）凝集法（HCV PHA法、またはHCV PA法）、または、（2）定量域の広い測定系を用い、得られた半定量的な「測定値」により、合理的にHCV抗体「高力価群」「中力価群」「低力価群」の3者に分別します。

注2)
判定結果の通知は、「現在、C型肝炎ウイルス（HCV）に感染している可能性が極めて高い」か、「現在、C型肝炎ウイルス（HCV）に感染していない可能性が極めて高い」かの２通りのみとし、判定の根拠を、前者の場合は①または②で、後者の場合は③④または⑤によったことを明示することとしています。

日常生活の場では、C型肝炎ウイルス（HCV）に感染することはほとんどないことがわかっています。したがって、毎年繰り返してC型肝炎ウイルス検査を受けなくても、現在のところ、上図に示す手順を踏んだ検査を１回受ければよいとされています。

ただし、「高力価群」の中には、インターフェロン治療等により、C型肝炎ウイルス（HCV）が身体の中から排除された直後のため、ウイルスがいなくても抗体価が高くなっている場合があることや、「低力価群」や、「陰性とされた群」の中には、C型肝炎ウイルス（HCV）に感染した直後のため、ウイルスがいても抗体価が低い場合や陰性の場合等がありますが、極めてまれなこととされています。

なお、C型肝炎ウイルス（HCV）以外の原因による肝炎もありますので、パンフレットに記載してあるような症状や肝機能異常がある場合などには、医師に相談してください。

＜参考文献＞

1. C型肝炎について（一般的なQ＆A）平成14年2月更新（改訂Ⅲ版）（作成 厚生労働省、作成協力 財団法人ウイルス肝炎研究財団、社団法人日本医師会感染症危機管理対策室、2002年2月）　厚生労働省のホームページ http://www.mhlw.go.jp/にも掲載されています。
2. 改訂2版 HCVの知識（財団法人ウイルス肝炎研究財団 2002年1月）

平成13年度厚生科学研究費補助金「肝がんの発生予防に資するC型肝炎検診の効率的な実施に関する研究」班作成

R100 この印刷物は再生紙（古紙混入率100%）を使用しています。

イラスト●春出真理子